

# 美術部へようこそ! 広島県広島市立二葉中学校

2年に1度、国際アニメーションフェスティバルが開かれる広島市。  
二葉中学校が毎年取り組んでいるアニメーション制作の活動についてご紹介します。

## 平和・広島をテーマにしたアニメーション

国際平和文化都市・広島市では、2010年より広島国際アニメーションフェスティバル(※1)実行委員会と連携し、「平和・広島をテーマにしたアニメーション制作支援事業」を行う。機材の貸し出し、スタッフの派遣など、中学校・高等学校でのアニメーション制作を支援する本事業。完成作品は同フェスティバルの応援イベントで上映される。

この事業に、開始当初から関わる美術部がある。広島市立二葉中学校美術部だ。「平和の尊さを後世に伝えることは、広島で生まれ育った私たちだからこそできること。前任校の美術部で、平和をテーマにしたアニメーションを作ったことがあるんです。BGMに、『ねがい』という曲(※2)を使って。本校へ異動後、それを部員たちに見せたのがこの活動の始まり」と振り返るのは、顧問の石原真理先生。自分が描いた絵が動く——生徒たちの関心は大きく、部の中心的な活動として制作に取り組むことになった。

### 一人きりではできない

部員は28名。10名ほどずつに分かれ、グループで協力しながら、約3か月かけて一つの作品を完成させる。制作の第一歩は、「ねがい」

の歌詞をもとにしたストーリーづくり。平和を願う心をより深く理解するために、被爆体験の語り部の方の話を聞くこともある。そうして絵コンテが仕上がったら、原画の作成に入る。分担しながら、トレース台を使って、コマごとに動かした絵を手で描いていく。1分間のアニメーションに必要な原画は、約200枚。それらをデジタルカメラで1枚ずつ撮影してパソコンに取り込み、先生が編集して動画にする。

原画の手描きは、石原先生が大切にしていることの一つ。「パソコンを使えば、コマ送りの画像をきれいに手早くつくれます。でも、中学生には手描きのほうが取り組みやすいし、色や動きがふぞろいなところが温かみを感じさせてくれます」。

ある部員は言う。「難しいのは色塗り。コマによって色むらが出ないように、みんなで塗り方をそろえます」。コマをつないでいくには、グループでの協力が欠かせないのだ。

「一人きりでは絶対にできない活動です。人と関わることに消極的だった生徒も徐々に、人を助け、人に頼ることを学んでいきます」と、石原先生。完成作品は、全校集会でも上映される。見てもらえるという喜びも、部員たちを支えているようだ。

「平和のアニメーションを、世界に広めたい」。これからの広島を担う生徒たちのまなざしは力強い。



上/これまでに制作したアニメーション4作品の原画の一部が縦に並べられている。  
左/過去、クレイアニメーションの制作に取り組んだときには、人形を数ミリずつ動かしながら撮影するという根気のいる作業が続いた。  
右/グループで声をかけ合って、調整しながら原画に色を塗っていく。

※1 広島国際アニメーションフェスティバル  
1985年より広島市で2年ごとに開催されている国際的なアニメーションの祭典。国際アニメーションフィルム協会、アカデミー賞公認。  
※2 「ねがい」  
広島市立大洲中学校での平和学習から生まれた曲。このときつくられたのは4番までの歌詞。その後、NPO法人「JEARN(グローバルプロジェクト推進機構)」によって、この歌詞の5番目をつくるという運動が展開され、現在も世界中から新しい歌詞が寄せられている。

# 教室を飛びだして

フラットホーム  
FlatHOME@グンダイビジュツトクシ

特別支援学校の生徒×教育学部の大学生×アーティスト。  
三者が協同して運営する「アートカフェ」についてご紹介します。



「らっしゃいませ!」  
——ここは、群馬大学教育学部附属特別支援学校(以下、特支)の生徒、群馬大学教育学部美術教育講座の学生、アーティスト・塩川岳氏が運営する「あそびアートカフェ」。地元の芸術祭「中之条ビエンナーレ」(※)の会場にオープンしているお店だ。

色とりどりに飾り付けされた店内には、レゴブロックや落ち葉などを使って造形的な活動ができる場が用意され、客と店員である生徒たちとの間に、楽しい会話が生まれている。

このカフェを企画した同大学教育学部教授の茂木一司先生は次のように語る。「地域のアートプロジェクトでは、障害のある子どもたちの参加がまだ少ない。そこで、特支の生徒たちと中之条ビエンナーレで何かやってみようと思ったんです」。特支高等部の生徒たちは、普段から地元のコミュニティカフェで就労体験をしている。その活動に、教育学部の学生とアーティストをコラボレーションさせ、アートカフェを開くことにした。お店は、お茶が飲めるだけでなく、客と店員の間コミュニケーションが生まれるよう、大学生、アーティストと一緒に工夫して、空

間を作り上げていった。  
運営に関わった同大学准教授の喜多村徹雄先生はこう語る。「特支の生徒たちが楽しんで活動していたのはもちろん、大学生たちも、予想しないことが次々と起こるので(笑)コミュニケーション力がつき、たくましくなったと思います」。

このプロジェクトは「FlatHOME@グンダイビジュツトクシ」と名付けられている。「みんながふらっと立ち寄り、コミュニケーションし、フラットな関係性をつくれる、居心地のいい場」という意味が込められているようだ。アートカフェは、まさにその名を体現する、みんなの憩いの場になっていたようだ。



アートカフェの様子。客はお茶を飲んだり、手作りのゲームを楽しんだりできる。

※中之条ビエンナーレ  
群馬県吾妻郡中之条町で2年に1度開催される芸術祭。  
<http://nakanojo-biennale.com>

# 放課後 ART

第8回